

ゆい
結通信

NO. 39

2018年10月30日

思いを伝えることから始めよう

牧野直子

2018年もあとわずか

今年もいつの間にか後2か月を残すだけとなりました。今年最終の結通信です。今年は色々予期せぬことがあり、まだ何が起こるかわからない不気味さを抱えています。夏の異常な暑さに振り回され、その後地震や台風などの災害も経験しました。情報を共有し、助け合うことの必要性を痛感しました。いざというときには、他人任せではなく、一人一人の知恵や行動が求められます。時にはすれ違いや誤解も起きるでしょう。「こんなはずではなかった」ということも。それも動いてみて初めてわかることです。

「結みのお」のチームワークを支えるものは

「結みのお」では、今年もコンサートやバザーなどのイベントを通して、色々な人が出会い、交流の機会がありました。試行錯誤を重ねながら、一緒に作り上げる手ごたえを感じています。

また、毎月「おしゃべりカフェ」や「結サロン」というようなお互いの考えや思いを出し合える場づくりをしています。そういう場で「こんなことを言ったら変に思われるのでは？」とか「失礼なのでは？」というような遠慮はいりません。ただし、お互いを傷つける言動はつつしまねばなりません。自分とは違う意見があることに気付くことがまずは大事なのではないでしょうか？

自分の思い、本音を言い合える、またそれを受け止めてくれる仲間がいるということは大きな心の支えとなります。分かり合える信頼関係を育てていくことは私たち「結みのお」の大切な使命だと思っています。

何でも言える空気を

「ご近所同士ではこんな会話がしにくい」と結ルームでよく聞きます。相手にどう思われるかわからないときには、当たり障りのない会話で済ま

せがちです。とくに日本では、政治的な意見を述べ合うという習慣ができていないので、そういう話題は避けがちです。相手がわかってくれるだろうと思うから思いをぶつけることができるのです。けれども、分かり合える仲間だけで通じる世界を作ってしまうことがあります。そうすると考えの違う人を排除していることにも気づかないものです。むしろ、違う意見だからこそ、お互いの違いに気づくことができるのではないのでしょうか？「この人と話しても無駄だ。所詮わかってももらえない」と思うと人は口をつぐんでしまいます。忖度が先行して物言わぬ社会にならないように気をつけねばなりません。「対話外交」と言われますが、「対話」が成り立つために、まず相手の声に耳を傾けること。「考え方は違うが相手は自分を尊重してくれている」という信頼関係があってこそ影響を与え合う関係が築けるのではないのでしょうか？

育ちあい、分かち合う

箕面に来て36年。私はその間子育て、親の介護、市議員や市民活動をしながらか、多くの方と出会い、影響を受けてきました。そして育てていただいて今の自分がいると思っています。失敗はつきものです。「結みのお」でも次々と新しいことにチャレンジしてきましたが、色々な失敗の経験を活かしてこそ次があります。まずは、臆せず自分の思いを伝えることから始めましょう。そしてそれを受け止める懐の深い関係をとともに築いていきましょう。それこそが現代版の「結」ではないのでしょうか？

満10年を迎える「結みのお」

結通信40号では「結みのおと私」を特集します。「結みのお」とのかかわりや「結みのお」で思い出に残ることなどを、同封のハガキに気軽に書いてお寄せください。ハガキは切手不要です、そのまま投函してください。メールやファックスでも結構です。12月末までお願いします。